



椿の茶床で

松岡 祥男

山の千枚田
茶床から煙がたっている

きょうは田んぼの草とりだ
ひざのあたりまでふみこみながら
腰をかがめ

稲のあいだの
浮草や水草を取り除いてゆく
ひとしきりつづけると

芯まで冷える
おかやんの唇は紫色になっている
あぜにさがり背をのぼして
少し日光をあびたら

また田にはいる
そのくりかえし

春先にいっぱいいた
腹が赤くて気味の悪いもりのやつらは
何処へ行ったんだろう
ぼくは茶の枝を折ってきて
火にあぶり

沸騰したヤカンに突っ込んで
お茶をわかす

もうすぐお昼なんだ
大きな岩と

しげった椿の木でできた茶床で

(まつおか つねお)